目次

はじめに……9

第一部　芸能研究

序章Ⅰ　本論の目指す「芸能」研究……15
一　「祭式」・「儀礼」から「芸能」へ……15
二　「芸能」の釈義について……19
三　各章の内容……20

第一章　芸能に付与される釈義と、釈義からの逸脱――天武期の芸能を中心として――……25
一　「芸能」について……25
二　王権によって釈義を付与される被支配者の芸能……30
三　天武朝の礼楽思想……36
四　天武朝の芸能概観……43

第二章　こころを解くわざ――『万葉集』巻十六・三八〇七番歌と左注の検討――……49
一　問題の所在……49
二　「影さへ見ゆ」という表現……50
三　井の「浅さ」を歌うこと……52
四　翻弄する歌……54
五　「撃膝」の意味……58
六　当該歌左注における「風流」……60
七　怒りを鎮めるあそび……62
第三章　前采女の「風流」――儀礼的拘束からの逸脱――……67
一　問題の所在……67
二　中国における「風流」の概観　初唐に至るまで……71
三　日本における「風流」の受容と前采女の「風流」（儒家的風流に焦点を当てて）……75
四　日本における「風流」の受容と前采女の「風流」（神仙的風流に焦点を当てて）……79
五　采女による坏の儀礼的奉献と「祇承」……82
六　「風流」の自己相対化……85
七　おわりに……87

第四章　景と心の共振――芸能的心性の一つの原点――……93
一　問題の所在……93
二　「ほに出づ」を導く動的な景……97
三　神の火の伝承と灯火に揺らめく幻影……98
四　穂を靡かせる神と霊魂……102
五　両義的な景と「意識の例外状態」……106
補説　芸能における「共振」……109

第二部　踏歌研究

序章Ⅱ　「男踏歌」の群行は「まれびと」なのか……115
一　折口信夫の「まれびと」論によって見出された「男踏歌」……115
二　「まれびと」の民俗と重ねられる男踏歌……118
三　歴史性を捨象された「男踏歌」……122
四　折口以後の「まれびと」論の問題と第二部の目的……124
五　各章の内容……126
第五章　宮廷男踏歌における「まれびと」――言吹についての基礎的考察――……131

一　問題意識……131
二　男踏歌に至る前史……134
三　男踏歌の「創始」……136
四　政治儀礼としての男踏歌、言吹……138
五　踏歌を構成する人々　近衛府上級官人について……139
六　踏歌を構成する人々　近衛府下級官人について……140
七　言吹と高巾子①　折口説の根拠としての『西宮記』大永本……142
八　言吹と高巾子②　大永本における二種の本文の関係性について……144
九　言吹と高巾子③　大永本における二種の本文から読み取るべきこと……150
十　言吹に対する同時代の眼差し――『源氏物語』踏歌記事の検討を通して――……154
十一　滑稽芸としての言吹――近衛府下級官人による散楽との共通性――……158
十二　中世・石清水八幡宮寺における言吹……160
十三　終わりに　言吹の「零落」……162

第六章　熱田神宮「踏歌詩」の淵源――農耕儀礼としての鍬制作に着目して――……169
一　問題意識……169
二　熱田頌文と田遊びの詞章の共通性……170
三　熱田頌文と伊勢神宮種蒔下始との平行性……175
四　伊勢の儀礼と熱田「踏歌詩」の相違……179

第七章　地方社寺踏歌の展開――石清水八幡宮寺に着目して――……185
一　問題意識……185
二　修正会の意義……186
三　石清水八幡宮寺の踏歌次第……188
四　十五日儀礼における踏歌の位置づけ……190
五　まとめと課題　修正会の外部性……197

第八章　地方社寺踏歌の変容――宇佐神宮寺の踏歌から――……205
一　問題意識……205
二　宇佐神宮の踏歌……206
三　修正会結願に出現する鬼――その両義性について――……212
四　鉄輪の鬼……216
五　厨家巡行の意義……219
六　おわりに……220

附録　群臣・男踏歌年表……227

第三部　常世研究

序章Ⅲ　「常世」は「まれびと」の故地たりうるのか　……263
一　問題意識　……263
二　折口論の展開と綻び　「まれびと」と結びつけられる「常世」　……265
三　「まれびと」と共同体の関係性　……266
四　上代における「常世」への心性　……268
五　現実に引き寄せられる「常世」　……272
六　各章の内容　……274

第九章　輻湊するまなざし
――「太上皇、難波宮に御在しし時の歌七首」及び家持の追和をめぐって――　……279
一　考察対象および問題提起　……279
二　七首の概要　……282
三　家持の追和二首　……284
四　切実な祈りの歌　……286
五　和風諡号について　……289
六　「とこ――」から滲む諦念と悲しみ　……291
七　輻湊するまなざし　……295

第十章　「国も狭に生ひ立ち栄え」――橘を植えひろめた人々――……301
一　タヂマモリの使命……301
二　三宅氏の周辺氏族……305
三　三宅氏の関与する屯倉……306
四　港湾と橘……309
五　港津を拠点とした橘の栽培……313
六　橘を植え広める意義……315
おわりに……321
あとがき……326
参考文献……327
引用文献……351
初出一覧……352
索引……001(左)

はじめに

本書の大きな目的は表題に示したように「古代的心性」の一斑を明らめることにある。具体的には折口信夫が学問の俎上に上せた「芸能」の論、および、折口学の中核である「まれびと」「常世」の論を足がかりとして、それらを批判的に受け継ぎつつ実証的に「古代的心性」へ近づきたいと考えている。本書は三部から成り、「芸能」については第一部「芸能研究」、「まれびと」については第二部「踏歌研究」、「常世」については第三部「常世研究」において考察を加える。各部における問題意識と研究目的はそれぞれの冒頭に置いた序論に述べたので、ここでは表題に含まれる「心性」と「古代的」という言葉が本書においていかなる意味を持つのかということについて聊か述べておくことにする。「心性」とはフランスの歴史学における mentalité の訳語であり、「ある時代・社会に特有な」（増尾・工藤・北條二〇〇三）、「人びとのこころの、自覚されない隠れた領域から、感覚、感情、欲求、さらには、価値観、世界像に至るまでの、さまざまなレヴェルを包みこむ広い概念」（二宮二〇一一）のことを指す。アナール学派によって一般化した「心性」概念であるが、その動向にはデュルケーム派社会学の「集合意識」「集合表象」論の大きな影響があったとされる（宮島一九八七、二宮二〇一一、増尾・工藤・北條二〇〇三）。柳田国男は民間伝承の資料を第一部「体碑」「有形文化」（目に映ずる資料）、第二部「口碑」「言語芸術」（耳に聞こえる言語資料）、第三部「心碑」「心意現象」（心意感覚に訴えて初めて理解できるもの）（柳田一九九八a・b）に三分類し、第三部の考究を民俗学の主目的に掲げている（柳田一九九八b）。川田（一九九〇）によれば、「心意」を重視する柳田の姿勢は、やはりデュルケームの影響を蒙っているという。また、折口（一九七一）は昭和十一年（一九三六）五月七日の國學院大學鄕土研究会の講義において、柳田国男が心意伝承研究の先駆者であることを述べつつ、「日本民俗学のうえに、最初に民俗伝承を置いてみたい」と述べている。

このようにデュルケームの影響のもと、日本民俗学は「心意」の研究を主目的として標榜するに至ったのだが、「心

意」という語は用いずとも、心性の考究はそれ以前から日本民俗学の重要課題であった。例えば折口（一九七一）は大正九年（一九二〇）十二月二十日の「民間伝承学講義」で、民間伝承における「精神伝承」、具体的には「生き死にに関しての考え」「永遠に対する考え」「他界の考え」「霊魂の問題」などを取り組むべき課題として挙げている。前三者については「異郷意識の進展」（初出一九一六）・「妣が国へ・常世へ」（初出一九二〇）などで詳しく論じられており、大正十年・十二年の両度の沖縄採訪の後、「古代生活の研究　常世の国」（初出一九二五）・「国文学の発生（第三稿）」（初出一九二九）といった「まれびと」論に結実した。[1] これらの一連の研究は、日本における他界・外来者についての心性史と言うことができるものである。

本書の用いる「心性」は、信仰に関わる心の有りようを中核とする折口の「心意」に学ぶところが大きい。しかし、考察の対象は必ずしも信仰の領域に留まらない。本書第一部では儀礼・祭式から発生する「芸能」を取り挙げているが、その主たる興味はむしろ、儀礼的・祭式的な拘束力から逸脱する奔放な人間の心性にある。また、第三部では折口が「まれびと」の故地と見做した「常世」に、永生たりえない人間の悲哀を見た。そして、そのようなネガティブさとは正反対に、現実の社会活動がもたらす豊かさの代名詞として「常世」を持ち出す能動性にも言及している。超自然的な存在に対する盲目的な信頼と渇仰を「信仰」と呼ぶのならば、「常世」への不信に満ちた眼差しも、常世を現実世界にたぐり寄せる能動性も、信仰的心性とは程遠いものだろう。したがって本書では、先述したアナール学派による広範な意味合いにおいて「心性」という語を用いることとする。

ただし、「ある時代・社会に特有な」ということに対しては、やや異なる視座を本書は持つ。よく知られているように、折口の言及する古代はある特定の時代を指しているものではない。それは、どの時代にも具現化しうる「民族の普遍の心意」（伊藤一九八八）のようなものである。本書における第一の目的も、時代や社会を貫く普遍的心性の闡明にある。例えば第二部（第六章）では、九世紀半ばの貞観年間における伊勢神宮の祭式と、十三世紀後半の熱田神宮におけ